

物語と人生

第25回総会における還暦記念講演

野田俊作（大阪）

要旨

キーワード：

今日は「物語と人生」というお話しをいたします。ことし私は還暦をむかえましたので、子ども返りをして、私が最初に読んだ本、あるいは最初に読んだ本ではないかもしれませんが、覚えているうちでもっとも古い本を材料にお話しをいたします。

『いたずらこぶた』という絵本ですが、昭和 27 年に出版されています^[1]。私は小学校に入るまで字が読めませんでしたので、昭和 29 年に読んだのだと思います。西暦 1954 年ですから、今から 50 年以上前のことです。しかし、今でもいくつかの場面を鮮明に覚えています。さいわい、大阪府立国際児童文学館に在庫があるのをみつけて、コピーさせていただきました。

この本のなかでもっとも印象的な場面は、図 2 に示したページです。「そのうち日がくれて、ぼっかりお月さんがでました。『ぼくのうちどこかしら。こまったなあ』。みちにまよったぶうちゃんはさびしくなってきました」と書いてあります、ぶうちゃんが迷子になるには、これまでのいきさつがあります。それについてはおいおいお話しをいたしますが、ともあれこの場面がもっとも印象的に思い出されます。

お断りしておきますが、この本が私のライフスタイルを作ったとは考えていません。そうではなくて、現在のライフスタイルがある部分を思い出させ、そこから現在の状況に応じた意味を汲



図 1



図 2

みとっているのだと思います。早期回想とまったく同じことです。

そこで、この場面から連想するエピソードを4つほど思い出してみます。

- 1) 1980年ごろ、つまり30歳をすこしすぎたころの話です。当時私は大学の助手選考に3度応募しましたが、3度とも採用されませんでした。それまでの人生の方針がすっかり狂ってしまって、私は途方に暮れてしまいました。
- 2) 1996年、私は12年間勤めた本会の会長を退任しましたが、後藤素規氏が後任の会長に選任されました。後藤氏は会長にまったくふさわしくない人なのですが、理事会が彼を民主的に選任してしまったので、私は途方に暮れてしまいました。
- 3) 1990年代のことですが、30代の男性と話をしているときに、私が「誠実に考えなければいけない」というようなことを言ったところ、その人が「なぜ誠実でなければならないんですか」と言いました。私は驚いてしまいました。「誠実に生きなければならない」ということに疑問を持つ人がいるというのが信じられなかったので、途方に暮れてしまいました。
- 4) 最近、何人かの熱心にアドラー心理学を学んでいる人を見ていて、日本のアドラー心理学が欧米のアドラー心理学と違う方向に、いわば「暴走」しはじめている感じを受け、これだけ自分の意見をおさえて国際基準で教えてきたのにどうしてだろうと思い、途方に暮れてしまいました。

「途方に暮れる」というのが感情ですが、これにはいくつかのこまかいニュアンスがあります。お話しが進むうちにすこしずつご説明します。

さて、こうして迷子になって途方に暮れてしまったような場合、私は、「私がやりすぎたな」と考えます。つまり「人が悪い」とも「運命が悪い」とも考えないで、「私が悪い」と考えます。自罰的なんですね。だから、油断するとウツ状態になります。このごろはコツがわかったのでありませんが。

では、この前にどんなことがあったのでしょうか。

話をそもそもの発端に遡らせましょう。覚えているのは、図3に示した、「よろこんだぶうちゃんは、水でっぽうに水をいれてでかけました。だれかにひっかけてやろうとおもって」という場面です。その前の場面がこの本の最初の絵です。図はあげませんが、そこには、「きょうはにちようび。おかあさんはおせんたくです。『ぶうちゃん、くだものやへいって、みかんかってきてちょうだい』と、おかあさんがおっしゃいました」と書いてあります。

私の関心は、いつも「実用的な知識」ないし「技術」にあります。水鉄砲が象徴しているのはそれだと思います。

エドモンド・リーチは、代数方程式 $x + y = z$ における x , y , z を《象徴》の例として、 $+$, $=$ を《記号》の例としてあげています^[2]。この式で、 x , y , z はその都度意味を与えられなければなりません、 $+$, $=$ は意味が完全に固定されています。このように、象徴の内容は、エピソードごとにかわります。

- 1) 私は学生時代から生物学的な医学よりも心理学的な医学に関心をもち、卒業後は内科に入局しましたが、精神科のゼミにも参加して、高石昇先生のもとでミルトン・エリクソンの心



図 3



図 4

理療法の理論と方法を学びました。卒後5年目に精神科の医局に移籍しました。また、学生時代から、医学を数学的に考えることに興味をもち、さまざまな方法を考えていました。ここでは、心理学と数学が水鉄砲です。

2) アドラー心理学を学ぶためにアメリカに留学して帰国しましたが、アメリカのアドラー心理学をそのまま日本に応用するのは難しいと感じて、「スマイル」という親子関係プログラムを作成しました。ここではアドラー心理学の特に子育てプログラムが水鉄砲です。

3) この話は、私自身の人生の話ではなくて、私の歴史理解の話です。そういうところにも、私は「いたずらこぶた」を使っているようです。現代の日本の原型ができたのは明治時代です。その時代に、日本は西洋から新しい技術を取り入れました。同時に「和魂洋才」などといって、古来の道徳を守るために天皇制を利用して教育勅語や修身教育などのかたちで、国民に道徳教育をおこないました。ここでは西洋の技術と古来の道徳が水鉄砲です。

4) アドラー心理学を学ぶためにアメリカに留学して帰国しましたが、日本にアドラー心理学を普及するためにアドラー心理学会を作り、基礎講座やカウンセラー養成講座をはじめました。ここではアドラー心理学の特に専門的な研究が水鉄砲です。

まあ、なんでもそうですが、はじめはすべてがうまくいきます。図4を見てください。『ぶうちゃん、いい水でっぼうもっているね』。たぬきのおじさんがいいました。『とってもよく水がとぶんだよ。おかあさんがかってくれたんだ』。ぶうちゃんはとくいになっていいましたという場面も、とても印象的に覚えていました。

エピソードについて考えてみます。

1) 卒業後2年目には初めての学会発表もしましたし、4年目には論文を書きました。みんなが「才能がある」と言ってくれました。精神科に移籍してからも、治療法についても研究についても、先輩たちは評価してくれました。

2) 本も3冊書いて、アドラー心理学の知名度は上がりました。テレビに出たこともありましたが、専門の雑誌はもとより一般向けの雑誌からもたくさんの原稿依頼がありました。

3) 日本は軍事大国になり、西洋列強なみに扱われるようになりました。経済的にはまだまだでしたが、道徳的な水準が高いことを誇りにしていました。そのことは、当時日本を訪れた外国人たちも、口をそろえて認めていました。

4) 1985年と1987年には国際学会で英文の論文を発表し、それは注目されて、両方ともドイツ・アドラー心理学会の機関誌に掲載されました。

しかし、いずれの場合も、私は人々の注目関心にはあまり関心がなくて、自分に実用的な知識が身についていることについて満足を感じていました。ですから、テレビや一般向けの雑誌とかかわるのは時間の無駄だと思って断ることにしましたし、「スマイル」を作ったのも親子関係というようなアドラー心理学の初歩的な応用に私自身がかかわりたくなかったからです。いわゆる「対人関係重視型」のライフスタイルではないということです。もちろん、注目関心があった方がいいのですが、私の知識なり技術なりを正当に評価して注目してくれるのであれば意味がないのです。マスコミやテレビが嫌いなのはそういう理由です。ドイツの雑誌に載ってもそれほど嬉しくなかったのは、彼らが私の研究を掲載したのは、内容を評価してくれたというよりも、エキゾチックだったからにすぎないと思っていたからです。

ところが、ここで調子に乗って、してはいけないことをついでしてしまいます。図5を見てください。「そのうちおもしろくなったふうちゃんはきゅうにいたずらがしたくなりました。『おじさん、みかんちょうだい』。ふりむいたぞうさんにしゅうっ。ぴしゃっ」。

1) 私は心理学的な医学の話をしすぎたのかもしれない。そのことが、生物学的な精神科医たちの反感を買ったのだと思います。精神病に効く薬物ができて以後、心理学的な治療は軽視されるようになりましたが、それでも精神科医たちは、自分たちは心理的な治療をしていると思っていました。しかし彼らがしていたことは、たんに話に聞き入ることか、あるいは常識的なお説教にすぎませんでした。それにたいして、エリクソンの方法は逆説的なアプローチで、常識的にはまったく思いつかないような問いかけや話しかけをしました。症例検討でそういう話をする、先輩たちはいちおうは感心して聴き入れてくれるのですが、内心は快く思っていなかったようです。また、論文中で使った数学的な手法も、あまりなじみのないものが多かったので、反感を買ったのかもしれない。多変量解析や時系列分析など、当時はまだごく一部の人にしか知られてない方法を使って解析していましたが、多くの先輩は私が



図5

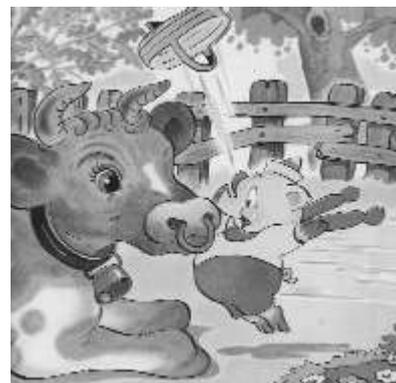


図6

なにをしているのかが理解できず、そのことが反感に変わっていったのかもしれませんが。

- 2) 坂本洲子さんという人が、私が作った「スマイル」を、私の意図とは違う方法で使っていたので、そのことについて注意をしました。坂本さんはシカゴに留学されましたが、私が日本に持ち込まないでおこうとした「論理的結末」という方法を多用して、子どもを支配するような方法を人々に教えていました。私がそれを批判したことが、坂本さんの雇用者であった岩井俊憲氏の反感を買いました。岩井氏は商人で、アドラー心理学を「売れる商品」としてだけ評価していました。
- 3) 昭和初期の日本国は、中国と戦争を始めました。そのことが西欧諸国の反感を買いました。特に植民地支配について出遅れていたアメリカは、満州の利権を日本に奪われたことについて、強く反感を持っていたと思います。
- 4) 私は学術研究に関心があって、マスコミなどを通じてアドラー心理学を普及することには熱心ではありませんでした。しかし、たとえば岩井俊憲氏などは、出版やテレビを通じて、アドラー心理学を大々的に普及しようとしていました。また彼は、アドラー心理学以外の研究をしている学者などとも関係して、みずからを権威づけしようとしていました。私はそのようなやりかたに批判的でした。そのことに岩井氏は反感を持っていたと思います。

このように、ある理論なり技法なりに夢中になって、それを使った結果、相手がどう感じるかを計算に入れずに行動することが、人々の反感を買うようです。それでどうなるかというところ、『このいたずらこぞうめ』。ぞうのおじさんはかんかんにおこって、大きなからだでのっしのっしとおいかけてきました」というように、水鉄砲で水をかけられた相手も怒りますが、それだけでは済みません。

図6を見てください。「ふうちゃんにはげました。たいせつな水でっぼうもすててどんどんどんどんにげました。あまりむちゅうでにげたので、おもわずうしさんにどしん。うしさんもおどろきました。のっそりとたちあがったうしさんは、じろりとふうちゃんをにらみつけました。『ごめんなさい』をわすれたふうちゃんを、『なまいきなこぶため』と、つのではねとぼしました」というように、意外な方向から反応があります。そうして、最初に示した図2の部分、「そのうち日がくれて、ぽっかりお月さんがでました。『ぼくのうちどこかしら。こまったなあ』。みちにまよったふうちゃんはさびしくなってきました」に到達するのです。

エピソードについて見てみます。

- 1) これはたまたまなのかもしれませんが、当時勤務していた病院の上司とうまくいかなかったり、患者さんが自殺したり、さまざまの困ったことがおきました。その時代に、教室の助手選考に3度応募して、3度とも採用されなかったのです。最初の迷子の場面で「途方に暮れている」という感情を言いましたが、その前に「信じている人に裏切られた」という感じが強くありました。信頼している先輩たちが、いざとなると私を見捨ててしまったと思いました。この「裏切られた」という感じは、「いたずらこぶた」には描かれていませんが、迷子の場面の感情に、子ども時代から伴っていた気がしています。しかし、それはいま思うだけで、子ども時代にはそうではなかったのかもしれませんが。

2) 私が会長を退任した後、岩井氏が後藤氏を会長に推薦しました。岩井氏が結局のところなにを企てていたのかいまでもよくわかりませんが、おそらく後藤氏を権威づけに使う、「スマイル」など彼が売っている商品を守ろうとしたのだと思います。岩井氏がそういう行動をしたことよりも、理事会が後藤氏を選任したことの方に私はショックを受けました。理事のある人たちは彼がどういう人であるかを知っていたはずだし、また私がどういう学会をめざしているかを知っていたはずなのに、みずから責任をとらないことを目的に行動しました。私は強く「裏切られた」と思い、ひとりぼっちになってしまった感じがしました。ここでは「うし」は理事会です。

3) 日中戦争にアメリカが介入して、やむをえず日本はアメリカとも戦争をして、完敗してしまいました。負けた結果、日本は水鉄砲を完全に放棄してしまいました。水鉄砲というのは軍事力ではありません。アメリカは日本人が自信を失うように、東京裁判をはじめさまざまな情報工作をし、その結果、明治風の道徳心も日本人は捨ててしまいました。こうして信頼していた天皇にも軍隊にも裏切られ、明治とのつながりを失って、日本は迷子になってしまいました。ここでは「うし」はアメリカです。

4) 後藤会長事件をきっかけに、学会の組織の再編成、基礎講座理論編の開始、「パセージ」の開発など、私から言わせると「雑用」に追われる日々が続きました。懸命になって論文は書きましたが、外国語の論文も書けないし、本も書けない不毛の時代をすごさなければなりません。ここでは「うし」は、一般向けの教育プログラムの開発や学会の雑務です。

「うし」は、直接的に攻撃したのではないのに、副作用としておこってくる困難の象徴になっていると思います。直接に攻撃対象にした「ぞう」よりも、予想外の場所からいきなり登場する「うし」の方が、大きなダメージをもたらすように、私は思っているようです。

こうして、「信頼する仲間に裏切られた」という感じがしたとき、私はすこし被害妄想的になって「みんなで寄ってたかって私をバカにしている」と思い込む傾向があります。むかしそれで大きな失敗をしたことがあって、それ以来制御が効くようになって、アクティング・アウトすることはなくなりましたが、それでもかなり落ち込みますし、同時に腹を立てます。できるだけ攻撃的にならないように気をつけていますが、それでも激しく怒っていると思います。

さて、迷子になった後、どうなるのでしょうか。図7を見てください。『おかあさん、はやく



図 7



図 8

むかえにきてよ』。いたずらっぼのぶうちゃんもとうとうなきだしました。わあんわあん大ごえでなきました。ぶうちゃんの大きなこえに、くまのおまわりさんがかけつけました。『おや、ぶうちゃんじゃないか。まい子になったのかね』、そうして、ぶうちゃんはくまのおまわりさんにおくられてうちへかえりました」ということになります。

エピソードについて考えます。

- 1) 大学人としての未来を完全に断念した私は、シャルマン先生が招いてくださるので、シカゴに留学しました。シャルマン先生は「くま」です。つまり、それまでのストーリーにはあられなかったけれど、突然登場して私を救ってくれる人です。
- 2) 1996年から1998年にかけてかなりの混乱がありましたが、梅崎さんや服部先生などが助けの手をさしのべてくださり、日本アドラー心理学会は立ち直ることができました。とくに服部先生は、後藤会長事件以前にはそれほど面識もなかったのに、「くま」となって私を助けてくださいました。ここでもういちど、心からお礼を申し述べます。
- 3) 「アメリカが助けてくれる」ということが、戦後ずっと日本人を支えてきました。ある人たちにとっては「共産主義が助けてくれる」だったかもしれませんが、しかし、アメリカや共産主義はほんとうに日本を助けてくれるのでしょうか。戦後の日本にはまだ「くま」はあられわれていないのかもしれませんが。だから、軍隊と道徳心はどこかに行ってしまったままで、「なぜ人は誠実に生きなければならないんですか？」と聞く人がいたり、子どもを殺す親がいたり、親を殺す子どもがいたり、教師が生徒に性的いたずらをしたり、生徒がお互いにいじめあったり、とつてもよくないことが続いているのだと思います。
- 4) 昨年はじめて ICASSI に参加しました。ICASSI に参加するということは、私の場合はあきらかに政治的な意味があって、これまで躊躇していました。それに、時間もありませんでした。参加した結果、これは私の問題を解決するために助けになるかもしれないと思いました。そこで友だちになったヨランタというラトヴィア人の女性を、2009年の9月から12月まで日本に呼ぶことを思いつきました。ヨランタが「くま」になってくれるといいなど、私は願っています。

「くま」は、「外からやってくる救済者」の象徴として使われていると思います。しかし、それは文脈の中で「くま」が救済者としてあらわれるからであって、「くま」という単語が「救済者」という単語と一対一に対応しているわけではありません。フロイトやユングは語から語への連想を考え、たとえば「くま」は文脈と関係なくいつでも「救済者」の象徴だというように考えます。ですから「夢辞典」というようなものを作ることができます。しかし、アドラー心理学は語から語への連想ではなく文から文への連想で象徴を考えます。ですから「夢辞典」というようなものを作ることができません。「くま」はときに「迫害者」の象徴になるかもしれませんが、「さる」が「救済者」の象徴になるかもしれません。

この本のはじまりは、「きょうはにちようび。おかあさんはおせんたくです。『ぶうちゃん、くだものやへいって、みかんかってきてちょうだい』と、おかあさんがおっしゃいました」でした。そして終りは、図8に示す『『おかあさん、ごめんなさいね。ぼくわるい子でした』。『いいのよ、

わるいことにきがつけば』。おかあさんはやさしくおっしゃいました」です。このように、困ったときに私は最初いた場所に戻りたいのです。「原点に戻って考えなおすこと」、これが多くの場合、私の問題解決法です。

- 1) シカゴに留学したことは、ある見方では人生をすべて変えました。またある見方では、学生時代からずっとめざしていた場所に到達したというところもありました。そこには求めているものがすべてありました。もっとも、いまシカゴに行っても、カリキュラムがすっかり変わってしまって、それはありません。ほんとうに希有なチャンスにめぐまれたと思っています。そういう意味では、助手選に落ち続けたことも、神さまのお計らいであるのかもしれない。
- 2) 「スマイル」が使えなくなったので「パセージ」を作りました。よりアドラー心理学の基本に忠実に設計しましたし、何度か自分でも運営してみて改良を加えました。「基礎講座理論編」も作りました。それまでは「カウンセラー養成講座」で講義していた基本前提などを、一般の人々にも知ってもらうようにしました。そうして学会が、ふたたび信頼できる人々のつどいにもどりました。
- 3) 日本の国がこれからどうなるのか、私にはわかりません。麻生首相が就任演説で、「かしこくも御名御璽をいただき、内閣総理大臣に就任をさせていただきました」と言っています。この方向はどうなのでしょう。明治のはじめに福沢諭吉は、天皇制になったからといって国民が道徳的になるわけではないという意味のことを言っています^[3] (pp.270-271)。では福沢の処方箋は何かということ、「文明の進むに従って智徳も共に量を増し、わたくしをおしひろめておおやけとなす」(p.177) ことだと言っています。つまり、自分のことを考えるのではなくて、公共のことを考えてくらしめるようになること、アドラー心理学風に言うと、共同体感覚の育成です。そうすると、「平和的な技術は日に日に進み、争いは日に日に衰え、ついには、土地を争う者もなくなるし、財産を貪る者もなくなるだろう。戦争もないだろうし、刑法も必要なくなるだろう。大砲のかわりに望遠鏡を作り、刑務所のかわりに学校を建てて、兵士とか罪人とかのありさまはむかしの絵とか芝居とかを見て想像するしかなくなるだろう」と言っています。しかし同時に、「それは遠い未来のことで、さしあたっては、まず日本の国と日本の国民があつてこそ、そういう新しい文明のことを語るができるのだ」(p.298) といって、国の独立を国民一人一人が自覚して守ろうとすること、そのために協力することの必要性を説いています。それが日本人の徳義を高める方法だということです。つまり、共同体感覚の育成は、国を愛し国を守る自覚からとりかかるのがいいのだと言います。そうかもしれません。この項目はまだ未知数です。
- 4) ヨランタを呼ぶのはどうしてかということ、彼女を通じて英語でアドラー心理学を学ぶ意欲をたかめたいからです。長期の留学は無理でも2週間の ICASSI ならみなさんに行ってもらえるかもしれません。行く人が増えれば、ICASSI そのものを日本に呼ぶことも夢ではありません。そうして日本のアドラー心理学と世界のアドラー心理学の間にある障壁を取り除いてしまいたいのです。私がシカゴで体験したのと同じことを、多くの人に体験してもらいたいのです。それは難しい道かもしれませんが、そうしないといつまでも、「信じていた人に裏切られて途方に暮れてしまう」ということを繰り返さなければなりません。

これで今日のお話しはおしまいです。

最後に、「いたずらこぶた」の作者の瀬尾太郎氏について紹介しておきます。瀬尾氏は、日本で最初にトーキー・アニメーションを作った人のうちの一人だそうで、人気のキャラクター『お猿の三吉』(1934年)や『のらくろ』を映画化したのにはじまって、長編作品『桃太郎の海鷲』(1942年)と『桃太郎海の神兵』(1945年)はいずれも戦争アニメーションの白眉とされているのだそうです。手塚治虫氏は『桃太郎海の神兵』を見て、「日本でもついにこんな見事な作品が作れるようになったか」と涙し、一生に一本でよいから漫画映画を作る決心を固めたといいます。その時日本はアニメーション大国への道を歩みはじめたわけですが、しかし、瀬尾氏はというと、敗戦のためか「燃え尽きてしまった」と語り、戦後は、アニメーション製作をやめて絵本に転向しました。『いたずらこぶた』は、その時代に描かれたものです。

戦争中に戦意高揚のためのアニメを作った人ですから、戦後の子どもたちにたいして考えるところがあったのだと思います。しかし、私は作品を作者から読者への情報伝達媒体だとは考えない立場にいますので、彼の意図についてはあまり関心がありません。それよりも、その作品を私がどう読み込み、どのように自分の人生の中で使っていたかの方に興味があって、今日はそのようなお話をいたしました。

もちろん私が思い出す本はこれひとつではありません。無数の本を私は使って生きています。たとえば、宮澤賢治の『グスコーブドリの伝記』や、レイ・ブラッドベリの『ウは宇宙船のウ』などは、小学生の間に読んだと思うのですが、私の人生に大きな影響を与えましたし、いまでもときどき読み返します。もちろん、本だけではなくて、きょうだいの体験、親との体験、友だちとの体験、先生方との体験などの思い出を、この『いたずらこぶた』の話を使うのと同じように使って、今を生きています。

ありがたいことに還暦を迎えることができました。最初にお母さんのおうちから出発したので、もういちどお母さんのおうちに帰って、もういちど水鉄砲を持ってでかけようと思います。たとえば、ヨランタはいまのステージの「くま」ですが、次のステージの「水鉄砲」であるかもしれません。その他にも、たくさん水鉄砲を使っています。たとえばスピリチュアル・ワークとか、今回尾中映里さんの研究で使った分析法とか、そういうものです。これからもこうして「いたずらこぶた」をして生きていくのだと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

文献

- [1] 瀬尾太郎：いたずらこぶた．大日本雄弁会講談社，1952．
- [2] E．リーチ著，青木保・宮坂敬造訳：文化とコミュニケーション．紀伊国屋書店，1981．
- [3] 福澤諭吉：文明論之概略．岩波文庫，1995．

更新履歴

2013年5月1日 アドレリアン掲載号より転載